
のび太のBIOHAZARD GAIDEN [OPERATION D]

ヲカラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

のび太のBIOHAZARD GAIDEN「OPERATI
ON D」

【Nコード】

N3968T

【作者名】

ヲカラ

【あらすじ】

ここは何処だ？自分は誰だ？記憶を失った主人公は銃を手に日本海に浮かぶ離島『しいなしま枇島』を駆ける。襲い来るゾンビ、命を狙う生存者、そして投入される謎の特殊部隊！！果たして主人公は生きて島を出ることができるのか？ 全体的に駄文&短めです。それでも良い方はどうぞお楽しみください。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

投稿って意外と難しい…

プロローグ

2004年、関東地方の町『ススキケ原』を大惨事が襲った。

国際製薬企業『アンブレラ』が開発した『Tウイルス』が人々をゾンビに変え、ススキケ原を瞬く間に死の町に変えたのであった。

アンブレラジャパンのメンバーは事件の隠蔽を謀り、ススキケ原の地下に設置してあった中性子爆弾を使用、アンブレラと結託した日本政府は原子力発電所の悲惨な事故としてこれを報じ、事件は一応の収束を迎えた。

だが、それを発端として日本各地で同じような事件が勃発。事件とアンブレラとの関係が取り糺されたが、情報操作と捜査関係者への圧力で有耶無耶にされてしまっていた。

そして、ススキケ原の事件から4年後、日本海に浮かぶ地図に無い島『しいなしま粧島』にて、事件は起きたのである。

強烈な痛みが目覚めとともに頭に走る。どうやら頭部をしこたま打ちつけたらしい。

「う……どこだ？ここ……」

背後には煙を噴き出すヘリコプターの残骸がある、これから落ちたのだろうか？

「……！？ な、何も思い出せない？ 僕は一体誰なんだ？」

落ち着いて確認しよう、自分の現在の持ち物は……

ジーンズの右のポケットには一万円札が二枚と千円札が三枚といくらかの小銭が入った財布、左のポケットにはオイル式のライターがあった。

ベルトにはホルスターがつけられてあり、その中には……

「け、拳銃！？ どうしてこんなの持っているんだ？」

グロック17という拳銃が収められていた。

「とにかく、長居は危険だな。ヘリがいつ爆発するかわからないし

……」

ヘリからはオイルがどくと漏れだしている。開いた扉の中に見えるヘリの操縦士らしい男は鉄パイプが首に刺さって絶命していた。僕は痛みに耐えながらも近くに見えるアーケード街に向かった。

背後から忍び寄る影には気づかずに……

プロローグ（後書き）

短いつてレベルじゃない……

第一話（前書き）

痛む体をおしてアーケード街へ向かう『僕』。
しかし、その目の前に…

第一話

「!? あなたは……!!」

目の前に白いスーツを着た自分より少し年上の少年が倒れていた。間違いない、僕はこの人を知っている。だが、記憶が痛みに遮られ、思い出すことは出来なかった。

よく見ると手には『金丸 士郎』と書かれた名札を持っていた。恐らくは彼の名前だろう。

「すまない、士郎さん。生きていた時のあなたがどのような人柄だったか思い出せないなんて……ん？」

何かの気配を感じる。そしてこの何かが腐ったような嫌な臭い……この臭いは幾度なく嗅いだ事がある。

僕は振り向いた……だけのつもりだった。

パン！と鋭い破裂音が響き渡り、硝煙の匂いがかすかに薫った。いつの間にか拳銃グロックをホルスターから抜き、発砲していたのだった。

「へ？ な、なんで？」

撃たれたモノは呻き声を上げ、どう、と崩れ落ちる。撃たれた相手は人間だった。ただし、とんでもない腐敗臭を体中から漂わせていたが。

「これは……全身が変色して腐っている……これじゃまるで……」
ゾンビ、と言おうとした途端、また呻き声が聞こえた。それも一つだけではない。

「少なくとも五、六体はいるな。何処か隠れる場所は……」
アーケード街の先には大きな病院が見える。あそこなら痛み止めや包帯などの治療器具が手に入るだろう。

僕はアーケード街を抜けようと歩き出そうとした、その瞬間だった。ドン！ドン！ドン！と大きな音が響き、僕の目の前にあった車が幾つも爆発、炎上した。

「ハハハ……くたばりやがれ、銭岡！！この町をメチャメチャにし

くさりやがって!!」

どうやら誰かがアーケード街の向こうから僕を狙ってきているらしい。いったい僕が何をしたというんだ？

「これは遠回りしなければ……横にあるゲーセンか、レストランか、ドラッグストアの裏口を通って行くしか……って、ドラッグストア？」

そうだ、ドラッグストアならそこにある商品で簡単な治療が出来るじゃないか。こんな事に気付かないとは……

炎や車の残骸の影に隠れながら僕はドラッグストアの空がなくなつた自動ドアをこじ開けた。

「間もなく降下ポイントに到着する。アルファ隊はベータ隊とともにB・O・W及び生存者の掃討を、デルタ隊は島のある中心にある新型反応爆弾を作動させよ。生存者は女子供、老人に至るまで皆殺しにせよ、我がアンブレラ社の幹部であろうとだ。ただし銭岡部長に関しては手を出すな、私が自らの手で始末する」

私は命令を伝えた後、消音短機関銃MP5SDを肩にかけ、サーマルマスクを被った。

銭岡のクソガキめ、何かやらかすのではと思っていたが案の定このザマか。それにしてもあいつの事だ、『あの化け物』を起動させている場合もあるかもしれん。

万が一のためと思って本社で開発中の『対B・O・W圧縮ガス弾』なる物を実践テストを兼ねて持ってきたが、これがリボルバーでしか使えないと言うので、わざわざ知り合いのガンマニアに土下座までして、最近使わなくなったというコルト・アナコンダを借りてきたのだ。

「ポイントに到着しました。ユニット、降下どうぞ」

ヘリに同乗しているオペレーターの声と同時に『ユニット』が次々と降下していく。

私はスピードローダーに込められたガス弾18発とガス弾の入ったアナコンダを肩のホルスターに収めた。合計24発、何事も余裕を持たせた方がいいだろう。

ベレッタ・クーガー
そして腰には自動拳銃を収める。なんでも『コマンダー』には必要な装備だとか。そんなことならばユニットにも補助武器を持たせてやればいいのにと幾度なく思う。

「コマンダー、降下どうぞ」

ちよつど装備を終えたところで降下許可が出た。私はワイヤーに手をかけ、降下する。

銭岡、首を洗って待っている。

第一話（後書き）

……余計なところの描写が多すぎてレベルじゃない。

5月25日 微修正

第二話（前書き）

ドラッグストアで治療をする『僕』。
しかし島にアンブレラの証拠隠滅部隊が迫っていた……

第二話

ドラッグストアで治療……というよりは応急処置をした僕は、グロツクを構えつつ慎重に店の外へと出た。

ゾンビの呻き声が近くから聞こえる。……いや、それ以外にも何か音がする。銃声？短機関銃か？サブマシンガン

車の残骸の陰からゾンビが二体のそのそと歩いてきた。僕はグロツクを向け、引金を引こうとした、が、短機関銃の銃声が鳴り響き、ゾンビが倒れこむ。

それと同時に何かが暗闇から飛び出した。緑色に光る暗視ゴーグルと短機関銃H & a m p ; K M P 5を持った一見特殊部隊のような出で立ちの人間だ。

特殊部隊は僕をじつくりと見ていた。どうやら何かを確認しているらしい。

と、不意に耳鳴りがした。僕は耳を押さえ、特殊部隊も頭を押さえていた。耳鳴りが止んだ時、特殊部隊の暗視ゴーグルの色が緑から赤へと変わっていた。

特殊部隊はM P 5をこちらに向け、発砲してきた。僕は間一髪で避ける。

僕は車の陰へと隠れ、グロツクを撃った。一発、二発と避けられるが、三発目にして胴体に当り、特殊部隊は仰向けに倒れる。

「■■■■ーッーッー！」

何やら聞き取れない言葉を喚きつつ、特殊部隊は溶けた。溶けた？溶けただつて？人間が、一瞬で溶けた？

「……どうなっているんだ？ここにはまともな人間は一人もいないのか？」

グダグダ考えても仕方がない。ここは一刻も早く病院へと行かないと。

僕はとりあえず近くのレストランへと足を運……ぼうとしたが。

「やっぱり利用できるものは最大限に利用しないとダメだな」

特殊部隊が溶けた跡のそばに転がっていたMP5を手に取り、肩にかける。近くには弾丸もあった。

……さつきからどうもおかしい、どうして僕は化け物相手にここまです戦い慣れをしているのだろうか？僕は一体、何者なんだ？

「デルタ隊より報告あり。【我々、反応爆弾ヲ発見出来ズ。何者カニヨツテ撤去サレタ形跡アリ】との事です」

オペレーターの通信にそんなバカなと一瞬思ったが、あいつならこれくらいはやりかねないだろうと私は思った。

だとすれば、反応爆弾は一体何処へ行ったのだろうか？仮にも島一つは消し去ることのできるほど強力な爆弾だ。

と、急な耳鳴りに襲われた。ユニットも頭を押さえ、暗視ゴーグルの色が緑から赤へと変わる。

「た、大変です。ユニットの指令が……、解除コード入力、拒否。

このままでは……」

「何が起こっている？」

「ユニットの指令がリセットされて、コマンダーを含めた全ての人間が抹殺対象になりました。指令強制解除コードは入力したのです……」

私の近くにいたユニット三体がこちらに銃を向けている。やむを得ない、か。

私はベレッタを抜き、前方のユニットに発砲する。上手い事眉間に当たった。

間髪いれず右手でベレッタを構え、左手でアーミーナイフを抜く。そのまま後方に居るユニットの胸を撃ち、同時に殴りかかってきたユニットの首にナイフを突き刺す。

ユニットは3体ともアポトーシスを起こし溶解した。

「すごい、流石は日本の死神……、あ、失礼しました」

「いや、いいんだ。慣れているからな。それに死神など私には過ぎた名だ」

日本の死神、か。アンブレラアメリカのセキュリティサービスにも死神の名を持つ男が居ると言うが……

ならば、なつてやろうではないか。仮にでも部下であるユニットにこの様な仕打ちをした者を屠る死神に、な。

第二話（後書き）

話が進まないってレベルじゃない。
戦闘描写があっさりしすぎというレベルじゃない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3968t/>

のび太のBIOHAZARD GAIDEN [OPERATION D]

2011年10月8日22時09分発行